

学生が福島、宮城訪ねる

東日本大震災から7回目の「3月11日」を迎える。被災地の多くは復興がままならず、その爪痕は大きくなっている。宗門校・筑紫女学園大学（福島県太宰府市）は震災翌年の2012年春から毎年数回、学生ボランティアが岩手、宮城、福島に赴き、交流会で郷土料理を作りし、現地の語り部から話を聞き、被災地の思いに触れる活動を続けている。今回も2月19日から日間、学生14人が被災地を尋ねた。

東日本大震災から7年

筑紫女学園大



同大学は、宗門校の学生として何かできることをと、2012年から毎年春と夏に2回ずつ、東日本大震災の被災地を訪ねて交流会を開いている。東北の人たちは若い学生の訪問を楽しみにしている。また、学生は活動を通して、いのち、人に寄り添う大切さなどを学んでいる。

ボランティアには毎回、多くの学生が参加を希望し、今回も抽選で選抜された14人が参加した。2回目の参加となる堤ゆいさん（3年）は「自分にも何かできないか」と、1年の時に初めて参加した。その時、被災者の方に「また来てね」と声をかけられた。その後東を果たすと再び参加した」と話す。

学生たちはまず、福島県浪江町に向かった。事故を起こした東京電力福島第1原子力発電所を高台から見た後、規制が解かれた地域を訪ね、人が住める状況ではない現状を目の当たりにした。

次日の日は、福島市の福島県復興支援業務事務所で、浪江町・常福寺の廣畑順住職から福島現状を聞き、同市などで福島県復興支援業務事務所が集まる交流会を開いた。学生を引率する宇治和貴准教授（熊本大・福寺副職）が法話を行ない、学生は福島名物の「水炊き」などを手作りした。そして、食事をしながら震災当時の様子などを聞

生として何かできることをと、2012年から毎年春と夏に2回ずつ、東日本大震災の被災地を訪ねて交流会を開いている。東北の人たちは若い学生の訪問を楽しみにしている。また、学生は活動を通して、いのち、人に寄り添う大切さなどを学んでいる。

福岡の味と心を届けて交流会

富城県では、仙台市で復興公営住宅2カ所で交流会を開き、学生は住民と一緒に、福岡の郷土料理「がめ煮」と「梅ヶ枝餅」を作った。若林区の若林西復興公営住宅の集会所には住人25人が集った。学生の訪問で笑顔が広がった住民たち。「若い人たちと一緒に料理ができる、楽しむ時間も過ごさせてもらえた。現状をもっと社会に発信していくしかない」と感想を述べた。学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返った。

「被災地の現状を社会に」

ボランティアを経えた学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返った。

学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返った。初めて参加した藤野奈央さん（2年）は、「大震災から7年が経った。初めて食べた梅ヶ枝餅はおいしかった」と喜んだ。4時間ほどの交流会を楽しむに呼び合っており、帰り際には別れを惜しむ声が上がっていた。

また、高城野区の燕沢東紙遊びの会で、初めて食べた梅ヶ枝餅はおいしかった」と喜んだ。4時間ほどの交流会を楽しむに呼び合っており、帰り際には別れを惜しむ声が上がっていた。

宇治准教授は「学生たちにはこの活動だけに満足せず、私たちは多くの人に生きさせている」ということや、新たな価値観、考え方を学び、それを社会に向けて発信することを考えるきっかけを得た。先輩からずっと続いたと語った。思いを引き継ぎ、また参加を希望する」と話した。（8面に関連記事）

富城県では、仙台市で復興公営住宅2カ所で交流会を開き、学生は住民と一緒に、福岡の郷土料理「がめ煮」と「梅ヶ枝餅」を作った。若林区の若林西復興公営住宅の集会所には住人25人が集った。学生の訪問で笑顔が広がった住民たち。「若い人たちと一緒に料理ができる、楽しむ時間も過ごさせてもらえた。現状をもっと社会に発信していくしかない」と感想を述べた。学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返った。

学生たちは、同市青葉区の仙台別院に併設されている東北教区災害ボランティアセンターで反省会を開き、活動を振り返った。初めて参加した藤野奈央さん（2年）は、「大震災から7年が経った。初めて食べた梅ヶ枝餅はおいしかった」と喜んだ。4時間ほどの交流会を楽しむに呼び合っており、帰り際には別れを惜しむ声が上がっていた。

また、高城野区の燕沢東紙遊びの会で、初めて食べた梅ヶ枝餅はおいしかった」と喜んだ。4時間ほどの交流会を楽しむに呼び合っており、帰り際には別れを惜しむ声が上がっていた。

宇治准教授は「学生たちにはこの活動だけに満足せず、私たちは多くの人に生きさせている」ということや、新たな価値観、考え方を学び、それを社会に向けて発信することを考えるきっかけを得た。先輩からずっと続いたと語った。思いを引き継ぎ、また参加を希望する」と話した。（8面に関連記事）